- 13) GOYINGS, L. S.: *J. Small Anim. Pract.*, 3, 223~224 (1962).
- 14) GREENE, J. A., KNECHT, C. D. and ROESEL, O. F.: *J. Am. Anim. Hosp. Assoc.*, 15, 199~202 (1979).
- 15) HIGHTOWER, D., KYZAR, J. R., CHESTER, D. K., et al.: *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, 163, 979~980 (1973).
- 16) HOGE, W. R., LUND, J. E. and BLAKEMORE, J. C.: *J. Am. Anim. Hosp. Assoc.*, 10, 167~170 (1974).
- 17) KALLFELZ, F. A.: *Am. J. Vet. Med. Assoc.*, 154, 22~25 (1969).
- 18) KALLFELZ, F. A.: *Am. J. Vet. Res.*, 34, 535~538 (1973).
- 19) KANEKO, J. J.: *In Clinical Biochemistry of Domestic Animals*, KANEKO, J. J., editor, 3rd ed., 491~512, Academic Press, New York (1980).
- 20) LIPPINCOTT, S. W., LEWALLEN, C. G. and SHELLABARGER, C. J.: *Arch. Pathol.*, 64, 540~556 (1957).
- 21) LORENZ, M. D. and STIFF, M. E.: *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, 177, 78~81 (1980).
- 22) 前出吉光, 佐藤博之, 戸尾祺明彦: 日獣会誌, 35, 695~699 (1982).
- 23) MANNING, P. J.: *Am. J. Vet. Res.*, 40, 820~828 (1979).
- 24) MARTIN, S. L. and CAPEN, C. C.: *In Canine Medicine*, CATCOTT, E. J., editor, 4th ed., Vol. 2, 1124~1144, American Veterinary Publications, Inc., Santa Barbara (1979).
- 25) MIZEJEWSKI, G. J., BARON, J. and POISSANT, G.: *J. Immunol.*, 107, 1152~1160 (1971).
- 26) MULLER, G. H. and KIRK, R. W.: *Small Animal Dermatology*, 174~176, W. B. Saunders Company, Philadelphia (1969).
- 27) MURPHY, B. E. P. and PATTEE, C. J.: *J. Clin. Endocrinol. Metab.*, 24, 187~196 (1964).
- 28) NESBITT, G. H., IZZO, J., PETERSON, L., et al.: *J. Am. Vet. Med. Assoc.*, 177, 1117~1122 (1980).
- 29) 大石 勇: 犬の内科診断学 (第2版), 175~179, 501~504, 日本獣医師会, 東京 (1982).
- 30) QUINLAN, W. Jr. and MICHAELSON, S. M.: *Am. J. Vet. Res.*, 28, 179~182 (1967).
- 31) RIJNBEEK, AD.: *In Canine Veterinary Therapy*, KIRK, R. W., editor, 5th ed., 791~797, W. B. Saunders Company, Philadelphia (1974).
- 32) 臼井和哉: 日獣会誌, 19, 臨時増刊, 420~421 (1966).
- 33) 鷺塚貞長: 日獣会誌, 35, 臨時増刊, 83 (1980).

公衆衛生

神奈川県における捕獲野猫の寄生蠕虫相

深瀬 徹* 茅根士郎* 板垣 博*

(昭和 58 年 10 月 21 日受理)

Helminthic Parasites of Stray Domestic Cats in Kanagawa Prefecture, Japan
TOHRU FUKASE et al. (School of Veterinary Medicine, Azabu University,
Sagamihara, Kanagawa 229, Japan)

SUMMARY

A helminthological survey was made on 105 stray domestic cats autopsied in Kanagawa Prefecture, Japan, over a period from October, 1981 to November, 1982. The cats were classified into two groups according to the conditions of tooth exchange. Group A consisted of 53 cats more than 3-4 months old and group B of 52 cats younger than these.

Parasitic helminths were detected from 66.0% of group A and 63.5% of group B. The infection rates of each species were as follows: *Spirometra erinacei* was detected from the small intestine of 17.0% and 1.9%, *Dipylidium caninum* from that of 20.8% and 13.2%, *Taenia taeniaeformis* from that of 1.9% and none, *Strongyloides planiceps* from that of 1.9% and 5.8%, *Toxocara cati* from that of 24.5% and 57.7%, *Ancylostoma tubaeforme* from that of 35.9% and none, *Capillaria* sp. from the bladder of 3.8% and none, *Physaloptera* sp. from the stomach of 1.9% and none, and *Dirofilaria immitis* from the heart of 1.9% and none of group A and B, respectively.

* 麻布大学獣医学部 (神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71)

要 約

1981年10月～1982年11月に神奈川県下において捕獲された野猫105頭について、その寄生蠕虫の検索を行った。供試猫は、歯牙交換の状態などにより、生後3～4カ月以上と考えられるもの（A群）とそれ未満と考えられるもの（B群）とに大別し、すべて剖検により虫体を採取した。

その結果、A群の猫では53頭のうち35頭（66.0%）に蠕虫の寄生が認められ、検出された種は、胃から *Physaloptera* sp. (1.9%)、小腸からマンソン裂頭条虫（17.0%）、瓜実条虫（20.8%）、猫条虫（1.9%）、*Strongyloides planiceps* (1.9%)、猫回虫（24.5%）、猫鉤虫（35.9%）、膀胱から *Capillaria* sp. (3.8%)、心臓から犬糸状虫（1.9%）で、条虫3種、線虫6種の計9種であった。また、B群の猫では52頭のうち33頭（63.5%）に寄生がみられ、小腸からマンソン裂頭条虫（1.9%）、瓜実条虫（13.2%）、*Strongyloides planiceps* (5.8%)、猫回虫（57.7%）が得られた。

これらの蠕虫の中にはマンソン裂頭条虫など人体にも感染するものが含まれているため、人獣共通寄生虫症の保有宿主として猫を十分に認識する必要がある。また、実験用動物として捕獲野猫を導入する場合には、これらの寄生虫の感染を高率に受けていることを念頭におくべきである。

猫は、犬と同様に、ペットとして、あるいは野良猫（野猫）として、人間の生活に密着しているところから、人獣共通感染症の身近な保有宿主（reservoir）として注目されている。また、近年、種々の実験に多数の猫が使用されるようになって、実験用動物としても重要となりつつあるが、これらの実験用の猫の供給源は捕獲野猫や不用となった飼い猫に依存している。このような観点から、各種病原体による猫（飼育猫および野猫）の汚染状況を知ることは重要である。

種々の病原体のうち寄生虫についても、細菌やウイルスと同じく重要視されており、近年においても各地でその感染状況の調査がなされている^{1,4,6,10,12,20,24,27,28,30-35)}。神奈川県においても、県中央部の飼い猫の蠕虫相が報告されている³⁴⁾が、野猫の寄生虫相は調べられていない。そこで、神奈川県下で捕獲された野猫の寄生蠕虫相の検索を行い、先に報告された本県の飼い猫の蠕虫相³⁴⁾との比較を試みた。

1. 材料および方法

調査対象は、1981年10月から1982年11月に神奈川県下において捕獲された野猫105頭である。これらの猫は歯牙の交換状態¹⁸⁾や体重^{18,29)}などにより、生後3～4カ月以上と考えられるもの（A群、53頭）とそれ未満と考えられるもの（B群、52頭）とに大別した。

虫体の採取は、すべて剖検により行い、主として胸腔、腹腔、消化器系、呼吸器系、泌尿器系および心臓、眼球について検索した。

採取した虫体のうち、条虫類は、5%ホルマリンまたは70%アルコールで固定の後、VAN CLEAVEのコンビンネーションヘマトキシリン染色あるいはMAYERの強ミョウバンカーミン染色を施して、染色標本として観察した。また、線虫類は、5%ホルマリンで固定の後、ラクトフェノール液で透化して観察した。

なお、寄生率の有意差検定は、 χ^2 検定により行い、少数例においてはYATESの修正を施した。

2. 成 績

A群53頭のうち35頭（66.0%）に、またB群52頭のうち33頭（63.5%）に蠕虫の感染が認められた。検出された蠕虫は、条虫3種（マンソン裂頭条虫、瓜実条虫、猫条虫）、線虫6種（*Capillaria* sp., *Strongyloides planiceps*, 猫回虫、猫鉤虫、*Physaloptera* sp., 犬糸状虫）の計9種であり、吸虫は認められなかった。これらの蠕虫類の寄生状況は、A群では猫鉤虫、猫回虫、瓜実条虫、マンソン裂頭条虫の4種が主勢をなしており、B群では猫回虫と瓜実条虫が圧倒的に多かった（表1）。なお、瓜実条虫はA群とB群の間に有意水準5%で寄生率の差がみられなかったが、猫回虫は有意水準1%で両群の間に寄生率の差が認められた。

猫1頭あたりの寄生蠕虫種数についてみると、A群・B群ともに、1種のみ寄生が多く、寄生の認められた

表1 検出された蠕虫の寄生部位と寄生率

種 類	寄生 部位	A群(53頭)		B群(52頭)	
		寄生 頭数	寄生率 (%)	寄生 頭数	寄生率 (%)
マンソン裂頭条虫	小腸	9	17.0	1	1.9
瓜実条虫	小腸	11	20.8	7	13.2
猫条虫	小腸	1	1.9	0	0
<i>Capillaria</i> sp.	膀胱	2	3.8	0	0
<i>Strongyloides planiceps</i>	小腸	1	1.9	3	5.8
猫回虫	小腸	13	24.5	30	57.7
猫鉤虫	小腸	19	35.9	0	0
<i>Physaloptera</i> sp.	胃	1	1.9	0	0
犬糸状虫	心臓	1	1.9	0	0

注) A群：生後3～4カ月以上と考えられる猫
B群：生後3～4カ月未満と考えられる猫

全頭数のうちのそれぞれ 60.0%, 75.8% であった。ただし、A群においては、同時に3種あるいは4種の蠕虫の寄生を受けているものもみられた(表2)。

また、A群について、春～夏(3～8月)と秋～冬(9～2月)の季節別寄生状況を比較すると、マンソン裂頭条虫と猫鉤虫は秋～冬に、瓜実条虫と猫回虫は春～夏に高い寄生率がみられた(表3)が、すべて有意(有意水準5%)に差が認められるほどではなかった。

表2 猫1頭あたりの寄生蠕虫種の構成

1頭あたりの寄生蠕虫種数	組み合わせ	A群(35頭)		B群(33頭)	
		寄生頭数	発生率(%)	寄生頭数	発生率(%)
1種	Se	3	8.6	1	3.0
	Dc	2	5.7	1	3.0
	Csp	1	2.9	0	0
	Sp	0	0	1	3.0
	Tc	4	11.4	22	66.7
	At	9	25.7	0	0
	Psp	1	2.9	0	0
	Di	1	2.9	0	0
2種	Se+At	3	8.6	0	0
	Dc+Tc	3	8.6	0	0
	Sp+Tc	0	0	2	6.1
	Tc+At	1	2.9	6	18.2
3種	Se+Dc+At	2	5.7	0	0
	Dc+Tc+At	3	8.6	0	0
4種	Se+Tc+At+Csp	1	2.9	0	0
	Dc+Tt+Sp+Tc	1	2.9	0	0

注) A群: 生後3～4カ月以上と考えられる猫
 B群: 生後3～4カ月未満と考えられる猫
 Se: マンソン裂頭条虫 Dc: 瓜実条虫
 Tt: 猫条虫 Csp: Capillaria sp.
 Sp: *Strongyloides planiceps* Tc: 猫回虫
 At: 猫鉤虫 Psp: Physaloptera sp.
 Di: 犬糸状虫

表3 A群の猫における季節別寄生状況

種 類	春～夏(23頭)		秋～冬(30頭)	
	寄生頭数	寄生率(%)	寄生頭数	寄生率(%)
マンソン裂頭条虫	3	13.0	6	20.0
瓜実条虫	6	26.1	5	16.7
猫条虫	1	4.3	0	0
Capillaria sp.	1	4.3	1	3.3
<i>Strongyloides planiceps</i>	1	4.3	0	0
猫回虫	8	34.8	5	16.7
猫鉤虫	7	30.4	12	40.0
Physaloptera sp.	0	0	1	3.3
犬糸状虫	0	0	1	3.3

注) 春～夏: 3～8月 秋～冬: 9～2月

3. 考 察

今回の神奈川県下の野猫の寄生虫検索成績を同じ神奈川県における飼い猫の寄生蠕虫相³⁴⁾と比較すると、寄生率は野猫ではA群 53頭中 35頭(66.0%), B群 52頭中 33頭(63.5%), 飼い猫では96頭中 59頭(61.5%)と両者に差はみられなかったが、検出された蠕虫の種類と猫1頭あたりの寄生蠕虫種数では両者に相違が認められた。すなわち、今回は、飼い猫で検出された横川吸虫は見い出されなかったものの、飼い猫の場合には検出されていない *Capillaria* sp., *Strongyloides planiceps*, *Physaloptera* sp., および犬糸状虫の4種の線虫が得られた。さらに、重複感染は飼い猫では最多が3種であったのに対し、今回の野猫では4種であり、野猫の方が多種の寄生虫を有していた。

今回の調査では吸虫類はまったく検出されなかったが、本県の飼い猫の場合³⁴⁾でも吸虫は横川吸虫が2.1%という低率で見い出されたにすぎない。ここ数年間の各地の猫の寄生虫調査成績^{1,4,12,24,30,35)}をみても、兵庫県で *Metagonimus* 属吸虫が比較的高率(14.7%)に認められている³⁵⁾以外、東京¹²⁾、旭川²⁴⁾、沖縄本島¹⁾、埼玉³⁰⁾、埼玉・茨城・東京⁴⁾では、肝吸虫や横川吸虫はまったくか、あるいは低率でしか得られていない。これは、都市部やその周辺地域では、河川の汚染や整備などによって、中間宿主の生息がみられなくなったことや、第2中間宿主である魚類を猫が捕食することが困難になったこと、さらに猫自体の食性が変化したことによるものと思われる。

ところで、近年、西日本および南日本を中心として壺形吸虫が猫に高率に寄生していることが明らかになっている^{10,13,14,16,17,19,31,35)}が、神奈川県では、今回の野猫の調査および先の飼い猫の調査³⁴⁾を通じて本吸虫は見い出されていない。しかしながら、最近、関東地方にも壺形吸虫が分布しているとの報告^{4,30)}があり、しかも本吸虫の第一中間宿主であるヒラマキモドキと第二中間宿主および待機宿主であるカエル類・ヘビ類は神奈川県にも多数生息していることから、今後、壺形吸虫が神奈川県下でも検出されることが予想される。

条虫では、マンソン裂頭条虫と瓜実条虫が高率に認められたが、猫条虫はA群で1.9%みられたのみで、本県の飼い猫の調査結果(9.4%)³⁴⁾と比較しても低い寄生率であった。藤波ら(1983)⁴⁾は、埼玉・茨城・東京の猫において、猫条虫は1973～1974年には11.0%みられたが、1980～1981年には検出されなかったと述べている。最近では、このように本条虫の寄生率が低いことがしばしば報告されている^{1,4,12,24,28,30,34,35)}が、この原因の一つとして、一般に指摘されている^{4,28,34)}ように、猫がネズミを捕食しなくなってきたことが考えられる。

線虫としては、今回の野猫の場合、猫回虫、猫鉤虫をはじめとして6種が得られ、線虫相は豊富であることが明らかになった。これらの線虫のうち、B群の子猫から得た *Strongyloides* 属線虫は、発育各期の虫体と虫卵の形態学的特徴や、実験感染による *prepatent period* や *patent period* などの生態学的特徴の観察により、すでに *S. planiceps* と同定して報告⁵⁾したものである。また、A群の猫から得たものも同様に *S. planiceps* と同定された例は少ない⁷⁻⁹⁾。しかし、北海道において本線虫と考えられるものが見られている²¹⁻²⁴⁾ことや、神奈川県からも得られたことから、本線虫はわが国に広く分布しているものと考えられる。

わが国の猫の膀胱に寄生する毛細線虫は一般に *Capillaria plica* とされている^{4,6,33)}が、大石 (1979)²⁶⁾は、東京の猫から *C. felis-cati* を得たとして、膀胱の毛細線虫の種類についてはさらに検討を要すると述べている。今回得られた虫体は、雌虫の陰門部に漏斗様の付属物を欠くことや、雄虫の尾端の形態、交接刺長 (約 2.4 mm) などから、*C. felis-cati* であると思われる。しかし、EHRlich (1947)³⁾は、*C. felis-cati* という学名の有効性を認めず、*C. felis-cati* とされる線虫には2種が含まれるとして、それぞれを *C. skrjabini* と *C. travassosi* と命名している。また、BUTTERWORTH & BEVERLEY-BURTON (1980)²⁾もこの説に従って *C. plica* と *C. travassosi* の鑑別点を記載している。このように *C. felis-cati* については分類学上の問題があるため、今回得られた *Capillaria* の種の同定は保留しておく。なお、Physaloptera 属胃虫については、雌虫が1隻得られたのみであるため、種の同定はさしひかえた。

猫の年齢別寄生状況をみると、猫鉤虫と Manson 裂頭条虫はA群の猫に多く寄生し、猫回虫と瓜実条虫はどちらの群にも高率に認められたが、猫回虫はとくにB群に有意に多かった。大石・久米 (1973)²⁶⁾および内田ら (1982)³⁴⁾は、猫を年齢1才を境として2群に分けて検討した結果、Manson 裂頭条虫と鉤虫は主に1才以上の猫にみられ、瓜実条虫と猫回虫は両群に同じように認められたと述べている。これらの報告と今回の場合とでは、猫の群分けの年齢が異なるため一概には比較できないが、その傾向はおおむね一致している。ただし、今回は猫回虫がA群に比べてB群に有意に高率に認められたが、これは、猫の年齢の区分を生後3~4カ月で行ったために、若齢の猫にとくに多く寄生しているという猫回虫の特徴をよく反映したものと思われる。

このような猫の年齢により寄生状況に相違が生ずる原因は複雑であるが、その一つとして蠕虫類の感染方法の違いも考えられよう。たとえば、Manson 裂頭条虫はカエル類やヘビ類を捕食することにより感染するために子猫では感染の機会が少なく、いっぽう、猫回虫の感染経

路は母猫からの垂直感染 (経乳感染) が主であるために子猫での寄生率が高いことになる。また、瓜実条虫は主な中間宿主がノミであるため、感染の機会は猫の年齢にあまり関係がないと考えられる。

季節別の寄生状況では、春~夏と秋~冬で寄生率に有意差の認められたものはなかった。これに対して、大石・久米 (1973)²⁶⁾は、神奈川とほぼ同じ気候条件と考えられる東京 (府中市とその近郊) において、瓜実条虫と鉤虫では季節による寄生率の差はなかったが、猫回虫では秋~冬にやや高率となる傾向がみられたと述べている。また、内田ら (1982)³⁴⁾は、神奈川県内の飼い猫において、Manson 裂頭条虫、猫回虫、猫鉤虫が春~夏にやや寄生率が高かったとしている。しかしながら、これらの報告における季節別の寄生率の相違はわずかであり、有意差の検定を行えば、差は認められないと考えられる。したがって、寄生率の季節的な相違はあまりみられないものといえよう。

以上のように、神奈川県下において捕獲された野猫の寄生蠕虫相を検索した結果、条虫3種、線虫6種が得られたが、これらの中には、Manson 裂頭条虫をはじめとして、人体にも寄生するものや幼虫移行症の原因となるもの^{11,15,25,36,37)}が含まれているので、人獣共通寄生虫症の保有宿主としての猫に十分な配慮をする必要がある。

また、現在、わが国では実験用猫の供給源を捕獲野猫や廃用飼い猫に頼らざるを得ない現状であるが、これらの猫が多種の寄生虫の感染を受けていることを念頭において実験を行うべきである。なお、猫を対象とする獣医臨床においては、高率に寄生が認められた Manson 裂頭条虫、瓜実条虫、猫回虫、猫鉤虫はもちろんのこと、今後次第に分布域が拡大すると思われる壺形吸虫や *Strongyloides planiceps* にも注意を払う必要がある。

稿を終わるに臨み、供試猫の入手にご協力いただいた麻布大学獣医学部附属犬センターの宮田清志氏に深謝いたします。

〔本論文の要旨は昭和58年度日本獣医公衆衛生学会 (関東) において発表した。〕

文 献

- 1) 安里龍二, 長谷川英男: 寄生虫誌, 31 (増) 60 (1982).
- 2) BUTTERWORTH, E. W. and BEVERLEY-BURTON, M.: *Systematic Parasitology*, 1, 211~236 (1980).
- 3) EHRlich, I.: *Glasnik Hrvatskoga Prirodoslovnoga Društva, Zagreb*, 1, 79~85 (1947) [文献2より引用].
- 4) 藤波不二雄, 田中英文, 大島 慧: 実験動物, 32, 133~137 (1983).
- 5) 深瀬 徹, 茅根士郎, 板垣 博: 日獣会誌, 36, 589~592 (1983).
- 6) 福井正信, 安達二朗, 坂井幸明: 寄生虫誌, 15, 343~345 (1966).

- 7) 堀江牧夫, 野田亮二, 野田周作, ほか: 寄生虫誌, 23, 1~7 (1974).
- 8) 堀江牧夫, 野田亮二, 野田周作, ほか: 寄生虫誌, 29, 45~54 (1980).
- 9) 堀江牧夫, 野田亮二, 野田周作, ほか: 寄生虫誌, 30, 215~223 (1981).
- 10) 井関基弘, 田辺和術, 宇仁茂彦, ほか: 寄生虫誌, 23, 317~322 (1974).
- 11) 影井 昇: 人畜共通伝染病, 村上 一, ほか編, 271~348, 近代出版, 東京 (1982).
- 12) 影井 昇, 木畑美知江, 浅野和仁, ほか: 寄生虫誌, 27 (増) 86 (1978).
- 13) 梶山松生, 梶山 緑, 原 行雄, ほか: 山口獣医誌, No.4, 1~4 (1977).
- 14) 梶山松生, 中元 緑, 鈴木了司: 山口獣医誌, No. 7, 1~6 (1980).
- 15) 亀谷 了, 市原醇郎: 本邦における人獣共通寄生虫症, 林 滋生, ほか編, 191~201, 文永堂, 東京 (1983).
- 16) KIFUNE, T., SHIRAISHI, S. and TAKAO, Y.: *Jap. J. Parasitol.*, 16, 403~409 (1967).
- 17) 木船悌嗣, 藤 幸治: 福大医紀, 3, 133~136 (1976).
- 18) KIRK, R. W. (editor): *Current Veterinary Therapy VI Small Animal Practice*, 1365~1371, W. B. Saunders, Philadelphia (1977).
- 19) 近藤力王至, 栗本 浩, 織田 清, ほか: 寄生虫誌, 23, 8~13 (1974).
- 20) 近藤力王至, 岡野 薫, 栗本 浩, ほか: 日獣会誌, 22, 255~258 (1969).
- 21) 宮本健二: 第 88 回日本獣医学会講演要旨集, 166 (1979).
- 22) 宮本健二, 稲岡 徹: 寄生虫誌, 31, 補 84 (1982).
- 23) 宮本健二, 久津見晴彦: 寄生虫誌, 27, 369~374 (1978).
- 24) 宮本健二, 久津見晴彦: 寄生虫誌, 29, 補 74~75 (1980).
- 25) 野田亮二: 本邦における人獣共通寄生虫症, 林 滋生, ほか編, 235~244, 文永堂, 東京 (1983).
- 26) 大石 勇: 獣医臨床寄生虫学, 獣医臨床寄生虫学編集委員会編, 423~426, 文永堂, 東京 (1979).
- 27) 大石 勇, 小林茂雄, 久米清治: 日獣会誌, 26, 543~546 (1973).
- 28) 大石 勇, 久米清治: 寄生虫誌, 22, 281~287 (1973).
- 29) ROSENSTEIN, L. and BERMAN, E.: *Am. J. Vet. Res.*, 34, 575~577 (1973).
- 30) 斉藤利和, 川上生三郎, 本山信雄, ほか: 寄生虫誌, 32, 補 10 (1983).
- 31) 高田季久, 井関基弘, 宇仁茂彦, ほか: 寄生虫誌, 25, 補56~57 (1976).
- 32) 高山幸三, 能勢 光, 岡野 薫, ほか: 日獣会誌, 18, 191 (1965).
- 33) 田中英文, 稲見芳治, 大島 慧: 寄生虫誌, 20, 補 19 (1971).
- 34) 内田明彦, 内田紀久枝, 鈴木立雄, ほか: 寄生虫誌, 31, 55~58 (1982).
- 35) 宇賀昭二, 松村武男, 山田都佐雄, ほか: 寄生虫誌, 32, 91~98 (1983).
- 36) 山下次郎: 実験動物, 21, 105~120 (1972).
- 37) 吉村裕之: 本邦における人獣共通寄生虫症, 林 滋生, ほか編, 284~296, 文永堂, 東京 (1983).

《海外文献要録》

白色コウノトリのヘルペスウイルスとニューカッスル病ウイルス

Herpesviruses and Newcastle disease viruses in white storks (*Ciconia ciconia*)

KALETA, E. F. and KUMMERFELD, N.: *Avian Pathol.*, 12, 347~352 (1983).

過去 10 年間におけるヨーロッパでの白色コウノトリの生息数の減少は, 事故の増加, 環境破壊, 殺中剤・除草剤などが原因となっているが, 伝染病についてはほとんど注目されておらず, 近年, ニューカッスル病 (NDV) が報告されているにすぎない。著者は, 1977 年に黒色コウノトリからヘルペスウイルス (HPV) を分離したが, この論文の中では, 白色コウノトリからの HPV と NDV の分離と抗体検査の結果を紹介している。

冬期採食できないため保護され, 家禽とは直接接触したことがない臨床的に健康な白色コウノトリの buffy coat から, 3 株の HPV が分離された。この HPV は,

先に分離された黒色コウノトリの HPV と血清学的に同一であるが, 家禽や野鳥から分離されている HPV とは異なることが証明された。またコウノトリは, コウノトリ HPV に対する抗体を保有しているため, HPV の感染が必ずしも病気を起こすとは限らないようである。

病気の白色コウノトリから鶏に強毒の NDV が分離され, 健康なものから鶏に弱毒な 2 株の NDV が分離された。なお, コウノトリの中に, PMV-1, PMV-2, PMV-3 に対する抗体をもつものが若干いた。

(日獣大 微生物学教室)